一月の天地

川口孫治郎

豐榮登る旭の光。ほの〳〵と東の空の白く、紫だちたる山際にいと麗かにさし昇りて樂しき新玉の年は來にけり。謹みて我大君の萬歲を祝し奉り更に互に健全を賀して、茲に何となく樂しく勇ましき心地ぞする。

金色燦爛たる服裝と星の如き勳章とに飾られて、將軍の駿馬に跨りて駈けくるあり、鏘々たるは其佩劍の音なり、戛々たるは駈け行く蹄の響なり。母に着せられし正月着寛に腕白小坊の竹馬に鞭つて楊々として走せ來るあり、其戴ける帽、其穿てる靴、正にこれ之が爲に前一夜殆んど眠られざりしものなり。シャン〳〵たる初荷の馬の鈴の響は如何、ブン〳〵たる凧の唸りは如何、更に一歩をすゝめてカチ〳〵たる羽子のはづみは如何。

堅木炭珍珍と熾る爐邊　窓外日は暮れて風寒きに煖爐のコー〳〵たる邊に、一家團欒し若くは親友相會して、過去を語り將來をはかる、風は止みて窓にささやくは霙なり、談益進む、霙に代りて投礫の如く聞ゆるは霰なり、それさへ音無くなりて夜はいたく靜まりぬ、天候は何かを示せるなり

千里一望の銀世界。腥めて窓を排すれば眩きまでに、雪の降り積りて、庭も甍も、枯木も松も蟻の小塚も富士山も、賤が伏屋も百敷の大宮も、見渡す限り白皚々。梅の花形點々たるは子犬の躍り出でたる標なり、楓の葉形散り布くは雀の地團駄踏みし跡と知れ。

晝尚ほ咫尺を辨じ難く降り去り來るさまを見よ、舞ふあり、飛ぶあり、踊るあり。打ちつうたれつ眼も鼻も　肩も背中も眞白となりて、茲を前途と雪投げ競ふ兒等もあり。押しつ押されつ、轉しつ轉けつ、終に轉げぬ雪團を、頓て其儘胴とふし、頭も載せて雪達磨　炭團の眼鼻の面白さ、勝閧あげて喜び勇む兒等もあり。

憐むべきは。雪中に、殘れる旃檀樹の實を啄まむとする椋鳥なり、南天の實や柾の種を籬にあさりに來る鵯なり。終日雪踏み越えて門に來る樽抬ふ童なり寒けき月の獨深と懸れるに立出でみれば、

乾坤凡て水晶宮。池の何處に鴉や眠るらむ、浮ぶ氷山の片蔭に白熊や蹲まるべく、遙かの沖に外套眼深く當番の水兵はうつ浪凍る甲板に立つならむ。月影ふみて歸る大路はいたく凍りつめ、歩む足駄の音カラ〳〵と冴に渡る。

翌くれば、井桁に釣瓶、敷石捨石など氷の爲に合從連衡し、小溝は全く張りつめられて氷の厚さ三寸、沼に霜柱の高さ一尺有余、氷柱は軒端に長さ二尺許、瀧の傍などには長さ五六尺に及ぶ。

池に湖に鏡の如く張り渡したる面に、勇ましく氷之を試むるものあり。

氷雪の豪氣と草木の勇氣　手に取りたる氷は唯一個の結晶体なり、終夜一條の罅隙に張りつめては

如何なる巨巖も頓ては裂けて碎くるなり。顯微鏡にて見たる雪は美しき一片の小六出花なり、雪崩となりては萬丈の高嶺より礫も巖も林も人家をも諸共に捲き込みて千仞の谿底に滑り落つるなり。此美しき此壯嚴なる此凜烈なる雪と氷との其隙に福壽草はやさしく黃金色して笑ふなり、柊は角立ちて靜に香るなり、欵冬の蕾は默して頭を擡げたり、芹も薺も勇むなり、雪と花との戰は將に之れより大に始まらんとするなり。

春たてば花とや見らん白雪の
かゝれる枝にうくひすのなく

かるたの秘訣

鷺　水

まちにまち兼た新年が參りまして、先づ〳〵、御目出たう厶ります、新年と申すものは、ほんとに、氣持の善いものでありまして、何となく、氣が、ゆつくりとして來まして、見るもの、聞くもの、御目出たい事ばかしで、憎いものもなければ腹のたつこともありませんで、誰も新年の時の樣な心を年中もちて、居たいものであります、何故に皆さんは、新年がうれしいのでありますか、學校が、御休みになるからでありますか、御雜煮餅が、たべられるからでありますか、また、羽子がつかれるからでありますか、其は人樣によりまして、色々樣々な譯があるでありましようが、私も大の正月が好きでありますが、私の好きな譯と申しますのは、他ではありません、即ち、歌留多遊びかされるからであります、其れで、實は正月は來なくつても、歌留多遊びさへ來ればそれで

よろしいのでありますが、是れは私一人ではありますまい、皆さんの内にも、隨分、私の樣な、歌留多の御好きな方が、あるだろうと思ひます、

或人は、歌留多は、衛生に害があるとか、何とか申しますが、其は歌留多も取り樣によります、血氣盛な若武者連が、兩手の掌で、疊の塵をたゝき飛して、あたら札を引き合つたり、もみ合つたり、猶ひどいのは、人の手から血を流したりしまして、夜の十二時頃に食事をし、おまけに其晩は徹夜といふ樣な事をすれば、其は最も害がありましようけれとも、元より皆さん方の遊ばす歌留多は、左樣な下品な遊びではありません、初めに列べた札は、終りまで、決して其位置を亂さないで他處のを取るにも、内のを取るにも、必ず二本指の先で致しますから、他の札に觸る樣な、汚い取り方はしないのであります、勿論、札の引き合ひなんぞ、思ひもよらない事であります、

御夜食などは、なるべく致さない樣にしたいものであります、あまり愛嬌がないと思へば、煎餅か蜜柑ですましまして、遲くも十二時には、やめる樣に致したいものであります。

人は何事に限らず、自分が、一生懸命になりました時が、一番其人の本性が知れるものでありますから、歌留多なども、なるべく、あざやかに、奇麗に取る稽古を致したいものであります、汚ない手つきで勝をしめるよりは、あざやかな、奇麗な手ふりで、敗を取る方が、其人の本性の美が知れまして、誠にゆかしいものであります、

皆さんも嘸御上手の事と思ひますが、さて、どうしたらば、歌留多が上手になるでありましよう

か、どうしたらば、人より取られない樣になるでありましようか、其につきましては、色々の御流義、があるでありましようが、茲に、私が人より習つたのを、少しばかり、御話致して見ようと思ひます、

歌留多を取りますには、申すまでもなく、先づ第一に自分の内を守りて、猶其餘力があれば、他處のを取りに出かけるといふ事が、必用でありまして、内をも守らないで、やたらに、出かけて參りますと、其御留守を人から襲はれまして、大敗北を來します、

内を守ると申します事は、とりもなをさず、何々の札が内に有たといふ事を、よく記憶致して置く事でありますが、是れは、中々、困難な事で、つまり、歌留多の上手下手は、此處から別れるのであります、其故に、申すまでもなく、容易く記憶する樣な法を、あみ出す事が出來れば、其人は、所謂、上手な歌留多取りであります、

其記憶法につきまして、百枚の札を、唯、無茶苦茶に、記憶しようとしますのは、無益な腦力を費しまして、とても、出來るものではありません。から、何か少しはかり、寄り處をこしらへまして出來るだけ、秩序的に、是を腦中に收めましたらば、前に比べて、容易に記憶が出來るに相違はありますまい、是處が即ち、歌留多の秘訣とでも申しますのであります、

其に就て、色々な方法がありましようが、或人は、下の句の頭文字の同じものを、一處に列べて置くと申しますが、其は極めて上手な人のする仕事でありまして、反て、人から、取られ易いに相

違ありません、また、自分が取るのにも、先づ、讀み手が、上の句を讀み終りて、下の句の頭文字まで來なければ、其處に、目が向かない譯でありますから、是法はとるに足りません、其處で私の申しますのは、皆さん御承知でもありましようが、先づ、上の句の頭文字の同じなので、下の句を列へで置くのであります、其れでありますから、例へば

知るも知らぬも
やくやもしほの
紅葉のにしき
こひしかるべき
人しれずこそ
おきまどはせる

といふ風にして置きますと、一寸知らないものが見ますと、秩序も何もない樣でありますが、實際見れは、大に秩序があるので、此六ッの歌の、上の句の頭文字は、皆この字であります、

斯ういふ風に、他の歌も、皆、上の句の頭文字で群をつくりまして、其群の内の歌が來ました時には、何時も、第何段目の、左とか、右とか、中とか其塲處を一定しておくのであります、即ち各の札の位置を確定するのであります、かくして置きますと、讀み手が、上の句の一字を讀むや否や早や、自分の目と手はいつしか、其處の處に、假令、其札が、自分の處に、有ても無くても、知らず〳〵、注意する樣になりますから、決して、人より取られるなんていふ樣な事はありません、即ち、眼のくばり處が、次漸狹くなりますから、腦力を費す事も、餘程少くて、上手に樂に取れます。

さて各群の列べ方の事でありますが、是は自分の思ひ〳〵に、どうでも便利にして、覺え善い樣

に勝手にきめて差支はありません、いろは順でもわかさたな順でも、または、何か上の句の頭文字のみにて、おもしろい歌でもあみ出して、其順にしてもよろしうありますが、何れにしても、大抵、三段か、四段位にして置くが、最も便利だろうと思はれます、そうして一番下の段、即ち自分に最も近い段の處に、一番多けいに列べておくがよかろうと思はれます、なぜと申しますと、先きに出してあるのが、どうしても人から多く取られますからで厶ります

今、上の句の頭文字にて、百枚の札を、多いのからかいて見ますと

あ	十七枚
わ、な	八枚
こ、お、た、	七枚
み	五枚
や、ま、か、よ、	各四枚
ひ、き、ち、い、	各三枚
ゆ、う、つ、し、も、	各二枚
ふ、め、む、さ、ほ、せ、す、	各一枚
合計	百枚

其れで、列べる時に、下の句の札を見れば、直に其歌の、上の句の頭文字を思ひ出す樣に、熱練なければなりません

今、一ッ必用な事は、上の句の一句と、下の句の頭の二三字とを、續け樣に、口ぐせにして置く事であります、例へば、よもすからねや、さむしさにいつこ、とかいふ風であります

右の秘訣を熟練致しますれば、いくら亂暴軍の強者が何人來ても平氣で決して敗ける事はありません、私などは、極めて下手の方でありまして、昔亂軍にして取ります時分には、百枚の歌留多を一

人でならべて取りますに、どうしても七分以上かゝり居りましたのが、右の秘訣で取りますと、三分から長くて三分二十秒ならば、少しも振動せずに、百枚を一人で取る事が出來ますから、まして皆さんの樣な、御上手な方々が、右の秘訣を、御熟練なさりましたらは、二分以内で百枚を取る事が出來るでありましよう。

子の日しに都へ行かん友もがな　　芭蕉

正月の飾り物と飲食物

せく生

我が國は年の始毎に、先づ門並に雙の青松雙の青竹を相對して立て之に注連繩をひきかけ、屋内の神棚には其注連の中間に干鯛雙尾、海老一箇及び橙、白柿、昆布、裏白、讓葉等の品々を懸け、鏡餅を供へて三ケ日は家人打ちよりて齒固、屠蘇、雜煮等を飲食し、壽を祝し邪を拂ひ家運の長久を祈る事、古よりの習俗にして、家々大抵同樣なれども、地方により又家々特有の家例或は貧富貴賤等によりて多少の相違あるが如し、此れ等の由來を知る事は甚だ面白く頗る有益なれども、今一々明かに知る由なし、只茲には古來よりの說に聊愚案を加へ、學問的にてはなく勉めて俗に略記せんとす。

（甲）裝飾物

（一）松と竹　此の二ッは飾竹、門松、立松、飾松などいひて家の所々に飾らる。支那にては松は百木の長として門閭を守るなど稱せられ、竹の節操と共に其の常盤なるを喜ばれ、我が國も松を千年

の契、竹を萬年の契などいひて共に吉事に欠くべからざる一品として、斯くは正月にも用ひ來りしならむ。

（二）炭　此れを飾松の本に用ふるは、炭が邪惡を去る（有機物を吸收し、空氣水等を清淨にする特性あり）爲といひ、又土中に埋もれて年久しく朽ちざるより、長久の意に用ふるなりともいへど、堅炭などいふ所より家運の堅き樣にといふ義といふ當れるが如し。

（三）飾繩と注連繩　飾繩は　連繩を著く大きくせるものにて、同じ起りのものなり。之は神代天の窟戸の故事に出で、總て神聖なるものには之を張りて妄に近く能はざる樣にし不淨を避くる意味の物なり。注連繩はもと「しりくめ繩」といひ古事記にも端出之繩とあり、「しり」は「の意」「くめ」は「籠にて藁の本を斷ち去らぬ意」ふい）しが、久しき間に轉訛して今日の如くいふに至れり。

（四）鯛　之は正月に言ふ目出度の語音に似たるより用ふるとぞ。

（五）鹽鮭と鹽大口魚　此れ等を用ふる處は鯛を用ひんとして得る能はざる山間か若しくは鯛はなくて此れ等は反て多き地方のみなりしに、後來は一般に此れ等が得易き爲め今日の如きに至りしか

（六）海老　蝦をかく書く故に字義も其の物も共に長老の意あり。即腰の曲るまで海にて老いたる物といふ意なり。

（七）熨斗　之は天照太神伊勢の國五十鈴川上にて神代の人形を學ばせ給ひて作り始め給ひたりと言傳ふる程なれば、其の語も其形も年老いて尙腰を「のし」て曲らず壯年者の如しといふ意にて海老とは反對の如くなれとも、海老は實に長壽の極に

して熨斗は其れに至る間の健全の意ならむ。

（八）昆布　「こぶ」ともいひて「よろこぶ」といふ國語に似通ふ緣起のよき物として用ひらる。

（九）橙　之は霜を帶びて黃に熟し、冬を過ぎ春に至て色ます〳〵濃く、夏を經て又色を變じて青く、久しきに耐えて新舊辨ずべからず、國音だい〳〵なるより代々ともかき嗽はずと雖も嘉祝の果とす。

（十）楪　之は新葉整ひて後に舊葉落つるが故に此の名あり。又親子草ともいひ、親は必ず子を得て後安心して死すといふ意に用ふ。

（十一）裏白　即齒朶は蕨に似て異なり。四時死れず。よりて松竹の如く嘉祝に用ふ。一說に「しだ」の齒は「よはひ」、朶は「えだ」にて齡は此の枝の如く伸長ずる義なりといへど如何。

（十二）野老　山藷に似たり。蝦を海老と書きて字義より祝の物とする類なり。

（十三）搗栗　搗の音勝に通ず勝負に勝つことを悅びて用ふるなり。

（十四）白柿　新年早々物を採り取るといふ意かみならず、其の花の黃金色なる、其の容態の奧ゆかしく、其の名までも福々しきが爲に、特に元日に飾られて又元日草ともいはる。

（十五）福壽草　正月に寒を凌ぎて咲き出づるの

（十六）鏡餅　餅は元來神靈に供する物（古昔主食したる時代ありしかして餅を）にして、天照太神天の岩戸より出御ましまし、時の事を寫して圓く製り鏡餅といひしならんか。其の重ぬるは單獨を忌みて隅數を喜ぶよりせりと。

（乙）飲食物

（一）屠蘇　又椒酒ともいひ製方一ならず。大方山椒、防風、肉桂、桔梗、白朮等を調合して之を紅絹を鱗形に縫ひたる袋に入れ、清酒若しくは味淋に浸したるものにして正月特に元旦に當りて幼者より順次年長者の飲むものなり屠は鬼氣を屠絶し、蘇は人魂を蘇醒す。之を飲めば年中の邪氣を除くべしと、江次第等見るに、元日より三ケ日平旦に天皇（嵯峨）清凉殿の東廂に出御ありて御齒固の御膳を供じ次に御藥を入れたる屠蘇を供する事、弘仁年中に始まれり。公事根源にも此の事を記して、「一人これを飲みぬれば一家病なし、一家これをのみぬれば一里病なし、一里のみぬれば一國病なしといふめでたき効能待れば年の始に之を奉る」などあり。

（二）雜煮　餅に大根、芋、菘、昆布、海鼠等を混して羹とす。種々雜へて煮る故に雜煮と稱し略して「かん」羹を祝ふといふ。之は上古生活の習慣の永く後世に殘りたるものなるべしといふ。

（三）齒固　上古には猪鹿の肉を用ひしが今は餅押鮎、芋等を用ふるに至れり。さるにても此れ等正月の儀式には歴史的に上古生活の狀態の殘りたるものあるを知るべし。齒固とは「よはひ」を固ひる義なり「イ」押鮎は鹽鮎にして鮎を「年魚」と書くより年を祝ふ魚とす（ロ）芋頭は民間に「いものかみ」といひて掃除頭玄番頭の「かみ」に因みたり。子多きより多子の義にとれりといふ。

（四）豆「ごまめ」「數の子」　之等は組重のものにして、（イ）豆は無病息災にて健全なる樣にといふ意（ロ）「ごまめ」は五万米鰮の事にて、矢張健全の義に取る。農家にては又田作と稱し武家にては小

殿原など祝詞を用ふ。（ハ）數の子は鰊の子なり鰊の本名は「かど」にて「かどの子」は「かずの子」と訛りたり。多子の義を取るなり。

以上列記したるが如く説明甚だ不十分なれども左の如き事までは約言するを得べし。（イ）古人の一般の敬神思想即一種の宗教心に基きたるものゐ事。（ロ）始を重んじ先祖を忘れぬ爲に古俗を守る事。（ハ）緣起即ち事物の兆を重んする習癖より何事も最初吉ならざれば終まで善き事を得ずといふ一種の信仰を以て正月を考へたる事。（ニ）一般に聯想上より正月に使用すべき言語事物は吉事善事に緣あるものをのみ用ひたる事。（ホ）其等の事物は自然に其の時節に合ひたる品の中より採用したる事なり。

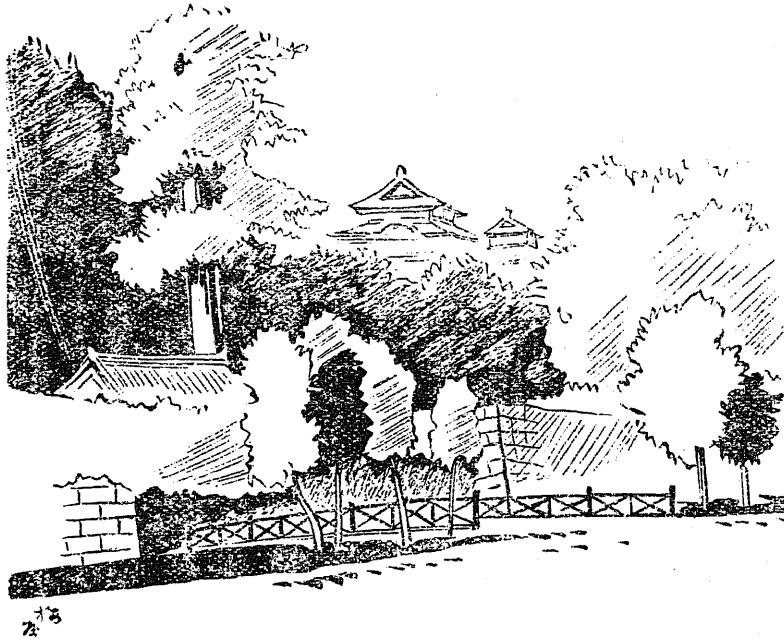
七草やあとにうかるゝ明烏　其角

和歌浦案内

和歌子

紀州の和歌浦と申せば、皆さん御承知でもございませうが、紀伊國の一の名所で昔聖武天皇が行幸あらせられた時に、明光浦といふ名を御つけあそばされた處でございます、景色のよいことは我國の三景に次ぐと申しますが果してそうでございますか、どうですか、私はまだ三景を見たをがございませんから、うけあふことはできません。しかし何にしても勝地で名高い處でございますから、今日はひとつそこに御案内をいたしませう。紀州に行きますには、東からでも西からでも大坂を經るのが順路です。そこで大坂市の難波ステーションから、南海鐵道の濱車に乘つて大坂灣に沿うて走り、和泉を通りて、紀伊に入りますと、間

もなく和歌山市の北口ステーションといふのに着きます。こゝから本町といふ賑やかな町を通て、和歌山市の中央まで參りますと、虎伏山といふ小山の上に。和歌山城が聳えて居ります。一寸立ち寄つて城に上りますと、隨分高いものですから、方々がよく見えます。和歌の浦も見えます。即ち和歌山縣、和歌山市にある和歌山城からはるかに和歌浦が見えるのでございます。さてこういふ高いところから見下した和歌浦は、又一段の景色でたれしも、あゝあすこに往たらどんなにいーでせう、と思はぬ者はありますまい。それではいよ〳〵此城を下りて出かけるといたしませう。



和歌山市を南にはなれて和歌街道を七八丁も行きますと、高松といふ處がございます。其名の通り高い松が道の兩側に並で居りまして、松風が颯々

と耳を洗ひます。夏の夕方、此松の下を月と一緒に歩くなどは、誠によい心持がいたします。此並木を通りますと左側に根上り松と申して、根の高く現はれたのがございます。又右側には高松の茶店と申て昔から名高い茶店もございます。

此茶店で少時休んで、又もや出かけますと、愛宕山、彌勒寺山、秋葉山などが左側にございます一々登て見ると和歌山市や、和歌浦が眼の下に見えて、眺望のよい處でございます。秋葉山には、楓樹が澤山ありますから、秋は是非御登りになることを、御すゝめ申します。それから龜遊岩と申て、龜が遊て居ると見れば見ゆるやうな岩、五百羅漢寺などを左に見て行きますと、いよ〳〵和歌浦に參ります、こゝは。和歌山市から一里ばかりでございます。

さて、いよ〳〵和歌浦に着きましたから、東の方からそろ〳〵見物いたしませう。まつ東の方に蘆邊浦といふ入江がございます。こゝは山邊赤人が

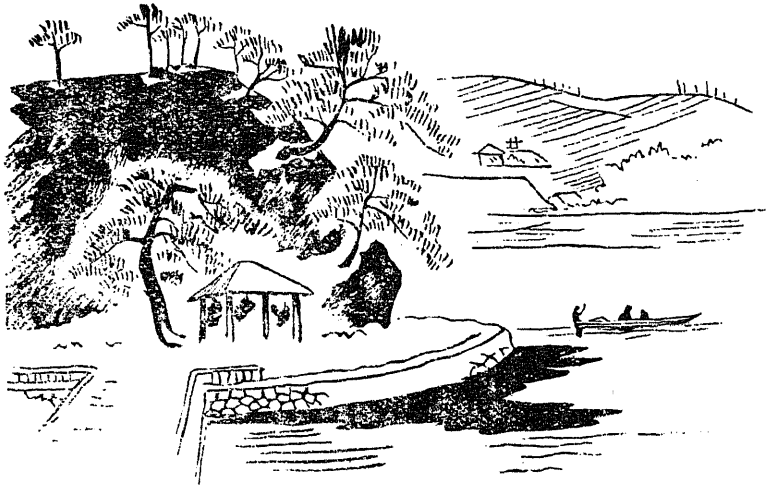
和歌の浦にしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

と詠じた處ですが、今はたつた一羽の鶴も居ません。こゝに鶴が居つたらどんなによかろう、と行く度に思ひます。只今は海苔と牡蠣を多く產します。この入江の中に、一の小さな島があつて、そこに妹背山といふ山がございます。三斷橋といふ石橋を渡て此島に行き山のすそを半分ほどまはりますと、觀海樓といふのがございます。俗に拜殿ととなへて居ります。

拜殿は水に臨んで建てた一寸神樂堂のやうな建物で、だれでも自由に入ることができます。向を

見れば、名草山の半腹にある紀三井寺は、入江をへだてゝ丁度向合になつて居りやすし、右方を見ると和歌浦がずつと見えますし、山と海の景色は實に何とも言はれません

私はあの夏の夜母や友だちと一緒に、此拜殿で月を見ましたが、名草山から大きな月のさし出るあんばい　浦の波が靜に拜殿のすぐ下の岩にくだくる音、實に心の底まで澄み渡るやうで、立ち去



ることが出來ませんでした拜殿にも別をつげて、又三斷橋を渡りますと橋の前にあしべやといふ家があります、こゝの名物は牡蠣飯でございます

こゝから元來た道を後にして、あしべやの後を廻て鷺山に登りませう。こゝは聖武天皇稱德天皇の行幸の事蹟で、和歌浦の全景が、一目に見へます

此山の麓に玉津島神社があります、昔から名高い神社でございます、こ

丶に御まゐりしてから、和歌浦の濱に行かうとする道に、不老橋といふ石橋がわります。

此邊には、獨螯蟹と申て一方の爪が至て大きく、一方の爪は至て小さい蟹がガサ〳〵と這つて居ります。子供なんかは、よろこんでつかまへようといたしせすが此蟹なか〳〵足が早く、こそ〳〵と穴の中に逃げこみます。

不老橋といふ名に若がへつて、勢よく進みますといよいよ和歌浦の濱邊に出ます。白沙青松と申ませうか心もちのよい浦風は吹きますし、向を見渡すと、白帆も見えます。青々とした水のはては、一直線になつて天と接して居ります。南の方には地の島、沖の島、雙子島などいふ小島も見えます。ほんとうに心がひろ〳〵といたします。

濱邊で一休して方々を見晴らし、勇氣を出して跣足になり貝を拾ひながら、たまにはよせて來る浪で裾をぬらして逃げながら濱邊をつたひますと片男波にまゐります。これは和歌浦の南の方の海濱のことで、いろいろの色をした陋石がちらばつて居りますから、海を見はらしながら、一休する價値はたしかにございます。昔はよせてかへらぬかたをなみとか、又は浪に大小がないとか申したそうですが、往つて見ますとやはり普通のやうに、大きい浪や小さい浪がよせてはかへり、かへりてはよせして居ります。

浪打際はこれでよして、方角をかへて陸の方に入りますと、和歌浦の西方の山の上に東照宮がございます。東照大權現、日吉大權現、摩陀羅神の三座を祀り紀伊藩祖頼宣郷の創められた社でございます。毎年和歌祭と申て賑かな祭典がござい

ます、又此山の麓には南龍社がありまして南龍院殿、即ち賴宣卿を祀りてあります。

和歌浦の名所はざつと之位でございます。御遊覽がすみましたらば、和歌浦町にでも、又はもどつて和歌山市にでも、御一泊おやすみなすつたがよろしいでせう。

いかがでした。三景に次ぎますかどうでございますか、御案内のしかたが下手でしたから、折角の和歌浦の價値を落したかも知れません。どうぞ、もつと〳〵景色のよい處と御想像を願ひます。

"Es ist nicht alles
Gold, was da glänzt.

輝くものは總て黄金にあらず

◉學事集會

●女子高等師範學校　▲附屬高等女學校に於ては先月六日第二回生徒演習會を催うし、校長主事職員等臨席生徒の演說、音樂、朗讀等あり頗る盛會なりし由▲同本校生徒は同月十四日如蘭會音樂部を開き、ピアノ獨奏、唱歌合唱、職員唱歌等あり音樂學校の島崎赤太郎氏のオルガン獨奏北村季靖氏の勸進帳等もありて之れ亦中々の盛會なりきと云ふ▲同終業式は廿四日を以て擧行したりしが▲同日保姆練習科卒業式擧行、學校長より今回卒業